

しかし、三木と子はその甲斐もなく一九四四（昭和一九）年三月二二日、結局肝臓癌で死去した。告別式は三月二五日自宅で営まれた。その一年後、一九四五年三月二八日三木清は治安維持法違反容疑者高倉テルを仮保釈中にかくまい、保護逃亡させたという嫌疑で警視庁に検挙され、六月検事拘留処分を受けて巣鴨の東京拘留所に移され、ついで中野の豊多摩刑務所に移された。敗戦後の九月二六日、自由と希望を眼前にしながら豊多摩拘留所で当局の苛酷な取り扱いのために非業の獄死を遂げた。どんなに無念な思いを抱いていたことだろう。しかし、彼は最も幸福であったかもしれない。かつて彼は『人生論ノート』（『文学界』一九三八年六月〜四一年一〇月）の「幸福について」（原名「個性と幸福——人生論ノート」『文学界』一九三八年七月）で次のように書いた。

「幸福は人格である。ひとが外套を脱ぎ捨てるやうにいつでも気楽にほかの幸福は脱ぎ捨てることのできる者が最も幸福な人である。しかし真の幸福は、彼はこれを捨て去らないし、捨て去ることもできない。彼の幸福は彼の生命と同じやうに彼自身と一つのものである。この幸福をもつて彼はあらゆる困難と闘ふのである。幸福を武器として闘ふ者のみが斃れてもなほ幸福である。」

〔付記〕今回は文部省科学研究費補助金（一般研究C）による野田宇太郎文学資料館所蔵書簡研究の第一二回報告である。調査にあたっては野田宇太郎文学資料館の山下徳子氏に資料整理や複写で御援助いただいた。深く感謝申し上げます。

去る十一日ひとまづ退院いたし、自宅で養生することにしました。その後却つて幾分具合が好いやうです。私も従つてこの頃はたいいて在宅いたしてをります。病人の食糧には弱つてゐます。牛乳のこと、できましたら、よろしくお願ひいたします。

いづれ近く拝眉の節に。  
 十九年三月十八日 清

野田學兄

〔注解〕

1 病人は三木清の妻三木いと子。腹膜炎で日本医科大学病院に入院中のところ、三月一日に一旦退院した。しかし全快したわけではなく、むしろ自宅で安らかに終末を迎えさせるための配慮であったのだろう。四日後の三月二日、遂にいと子は肝臓癌（一九四四年七月一日付野島貞一郎宛三木清書簡による）で死去した。告別式は三月二五日午後一時より二時まで自宅で営まれた。

3

野田宇太郎宛の三木清書簡(1)(2)(3)は三木がマニラに派遣された時のものである。三木清書簡(1)では自著を刊行し、やつと手にして「この時世にしては先づ結構な出来」と感激、喜んでゐる姿がうかがえる。「知識哲学」は新稿が加えられる予定だったのであろう。しかし、都合で新稿は遂に完成せず、新著に加えることができなかつた。将来、増訂する時、これらを加え、「堂々たる本」にしたという希望を述べている。「本が売れることは有難いですが」とあるので、新著はよく売れていたのだろう。「税金を払ふために更に新しい本を出さねばならぬ」ほど「所得税はたいへん」だったのか。当時の税制についてまだ調査していないので、その所得税の苛酷さがいかほどであるか、わからない。一九四二（昭和一七）年八月といえは、太平洋戦争も熾烈になり、ミッドウェイ海

戦（六月）に敗北、米軍は反攻に転じた。八月に米軍はガダルカナルに上陸した。戦局は不利になった。この時期に出版界は多事多難、時局にそぐわない哲学書の刊行は困難を極めていたと思われる。「こんな時世」という言葉に三木のさやかな抵抗の姿勢を読み取ることができる。

「書くことよりも読むことに勤めてゐます」とは、言論統制厳しき今は雌伏の時であり、じっくり内実を充実させるべきだと考えていたと思われる。「現地第一主義」とは「フィリッピンの東洋的性格」のような現地のフィリッピンについての民族性、言語、教育、文化などを考察することであつた。当局から危険人物視されていた三木が陸軍の徴用の応じてマニラに赴いたことは、彼にとつて緊張を緩和するには好都合であつた。マニラの日本語雑誌『南十字星』に連載した「比島人の東洋的性格」は帰国後、「改造」（一九四三年二月）に掲載、「中央公論」（一九四三年三月）に掲載の「フィリッピン」と共に軍の徴用に対する反対給付の意味で掲載を許されたのであつた。

三木清書簡(2)ではここでも野田は三木を激励する「寄せ書」を送っている。野田の三木に対する熱い思いを見ることが出来る。

三木清書簡(3)は「散文的な生活」という言葉が注目される。フィリッピンに渡つて約十ヶ月、おそらく殺伐とした不快な生活に嫌悪を感じ、望郷の念が催してきているのであろう。そして「新しい仕事」に思いを致している。

三木清書簡(4)は日本帰国後のもので、一九四三年九月イタリアは連合国に無条件降伏し、戦局はいよいよ重大な段階に至つた時期のものである。三木の「年譜」（『三木全集』第一九巻）では一九四三年五月から四四年二月まで一〇ヶ月間全く記載がない。発表の場もなく、じつと息をひそめていたのであろうか。

三木清書簡(5)(6)は三木にとつて地獄のような日々悲鳴である。一九二九（昭和四）年四月結婚した喜美子（旧姓東畑）は一九三六年八月亡くなった。一九三九年一月小林いと子と再婚した。いと子は四三年一月初め肝臓の腫瘍から生じた腹膜炎とかで日本医科大学第二医院に入院した。重態で三木も毎日病院に行つて看病した。戦争も末期的状况で人不足、物不足の中、看病は困難の極限にあつた。「病人の食糧には弱つてゐます。牛乳のこと、できましたら、よろしくお願ひいたします」は、よくよく思い余つた上での、援助懇願であらう。権力者から忌避された者の悲惨な窮状は見るに忍びない。野田は不足勝ちの中から食糧救援をしたことであらう。

[注解]

- 1 第一書房 一九三七(昭和一二)年六月、長谷川巴之吉が創業した出版社。松岡譲の「法城を護る人々」を処女出版。堀口大学の「月下の一群」など上田敏、萩原朔太郎らの豪華詩集や、「小泉八雲全集」「近代劇全集」「今日の詩人叢書」「ホリディ叢書」「短歌文学全集」「俳句文学全集」や、「オルフェオン」同人誌「文学」「セルバン」(「新文化」)などの雑誌を発行して、ユニークな出版社となった。一九四四年二月、全盛中に廃業した。小山書店にいた野田宇太郎は一九四三年第一書房に入社して「新文化」の編集にたずさわり、一九四四年四月退社して、河出書房に移った。
- 2 女房 三木いと子。一九四四年一月一日付岸本純子宛三木清書簡(「三木清全集」第十九巻)によると、「肝臓の腫瘍から生じた腹膜炎」で「十一月初めから……入院」(二月一日付野島貞一郎宛、二二日付榊田啓三郎宛、二八日付坂田徳男宛)した。
- 3 日本医大病院 日本医科大学は一九〇四(明治三七)年日本医学校として創立、一九二六(大正一五)年日本医科大学に昇格した。東京都本郷区(現・文京区)千駄木町にあった。お申越しの原稿 おそらく第一書房発行の雑誌「新文化」に掲載するための原稿を、野田宇太郎が三木清に依頼したものであろう。しかし、三木の原稿が「新文化」に掲載されることはなかった。

(6) 一九四四(昭和一九)年三月一八日付5銭切手ペン書封書(消印 判読不能)

都下吉祥寺二五〇七

野田宇太郎様

杉並区高円寺

四ノ五三九

三月十八日

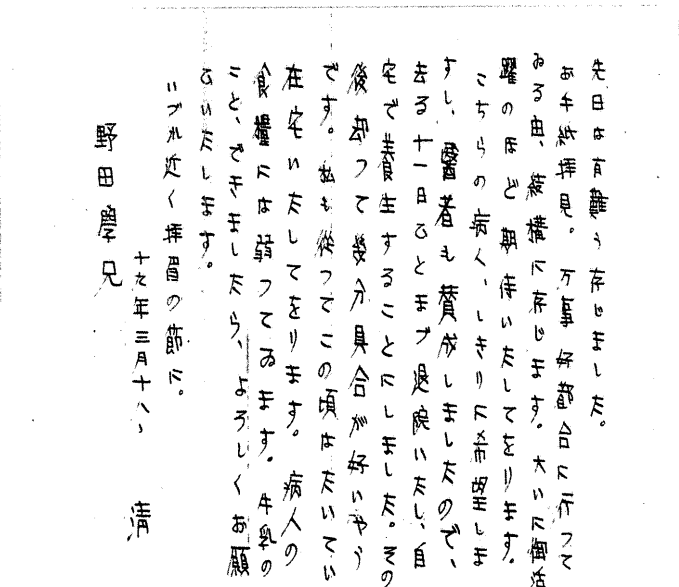
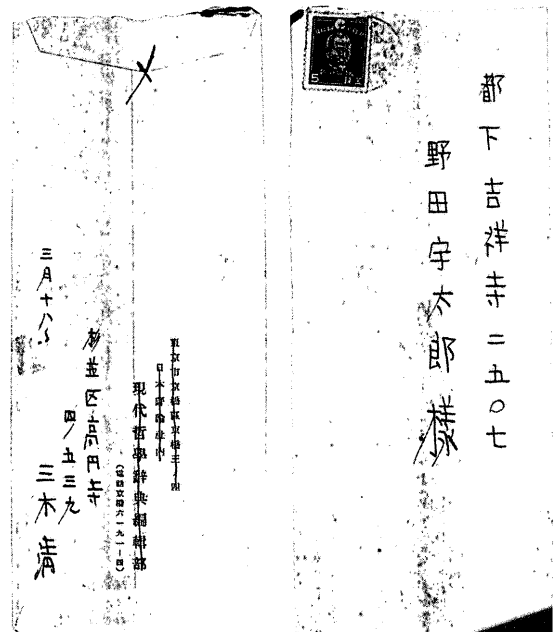
三木 清

先日は有難う存じました。

お手紙拝見。万事好都合に行つて  
ある由、結構に存じます。大いに御活  
躍のほど期待いたしてをります。

こちらの病人、しきりに希望しま

すし、醫者も賛成しましたので、



(6) 1944 (昭和19)年3月18日付 野田宇太郎宛三木清書簡

(5) 一九四四(昭和一九)年一月八日付5銭切手ペン書封書(消印 解読不能)

麹町区三番町一

第一書房

野田宇太郎様

東京都杉並区高圓寺四丁目五三九番地

三木 清

昭和十九年一月八日

新年おめでたう存じます。

お手紙拝見しました。御無沙汰しまし  
たが、いつも御壮健で御活動の様子  
にて、およろこび申し上げます。私も元

氣でゐます。ただ女房が腹膜炎で

もう七十日ばかり本郷千駄木町の日

本醫大病院に入院加療いたしてを

りますが、いまだに捗々しくなく、心

配してゐます。私も毎日病院通ひで

すが、時節柄不自由で困ります。右

の次第で、お申越しの原稿できれ

ば貴意に沿ひたいと思ひますが、

もう少し様子を見ないと確答申

し上げかねる次第であります。御諒

承願ひます。

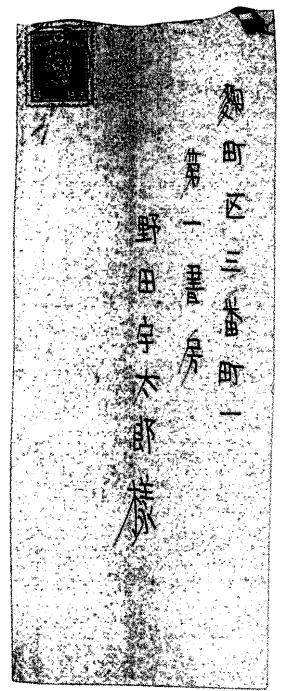
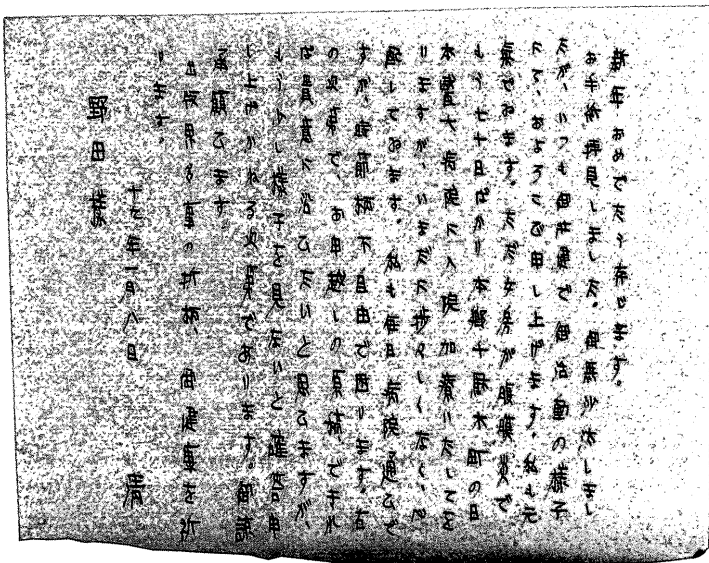
出版界多事の折柄、御健康を祈り

ます。

十九年一月八日

清

野田様



(5) 1944 (昭和19) 年1月8日付 野田宇太郎宛三木清書簡

〔注解〕

- 1 「早春」は志賀直哉著の小説・随筆集『早春』（小山書店、一九四二年七月）である。詩集Ⅱここでは野田宇太郎の詩集『旅愁』（大沢築地書店、一九四二年一月一日）であろう。マニラの三木清の手にまだ『旅愁』は届いていなかった。『旅愁』は戦時中にしては珍しくベストセラーとなり、初版は三〇〇〇部瞬く間に売れ、第三版は一九四五年二月二〇日東京出版から発行された。戦中、戦後の索漠とした混乱と虚脱の中で活字に餓えた人々は、雨水が砂漠に染入るように『旅愁』を貪り読んだのである。
- 2 正月は、雨水が砂漠に染入るように『旅愁』を貪り読んだのである。
- 3 正月は一九四三年一月。三木清は一九四二年一月にはマニラから日本に帰国したものと見える。一九四二年（日付不明）唐木順三宛や野島貞一郎宛書簡（『三木清全集』第十九巻「書簡」岩波書店、一九六八年五月二四日）にも「正月は内地で迎へることになる見込です。」とある。
- 4 小山君は小山久二郎のこと。書簡（Ⅰ）〔注解〕10を参照のこと。

（4）一九四三（昭和一八）年九月二六日付2銭官製葉書ペン書（消印 不明）

都下吉祥寺

二五〇七

野田宇太郎様

杉並区高円寺

四ノ五三九

十八年

三木清

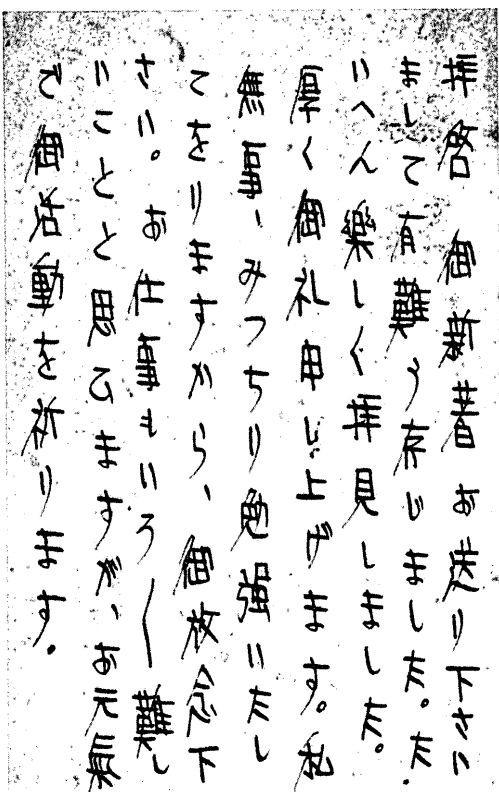
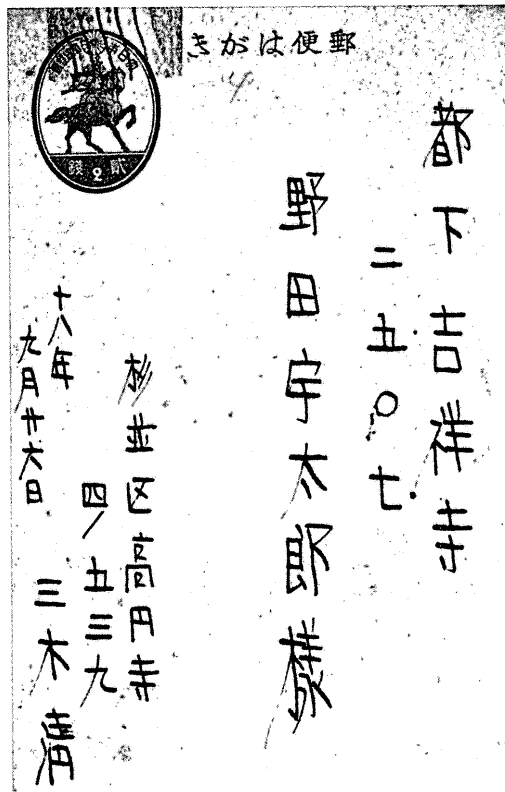
九月廿六日

拝啓 御新著お送り下さいまして有難う存じました。たいへん楽しく拝見しました。厚く御礼申し上げます。私無事、みづちり勉強いたしてをりますから、御放念下さい。お仕事もいろいろ難しいことと思ひますが、お元氣

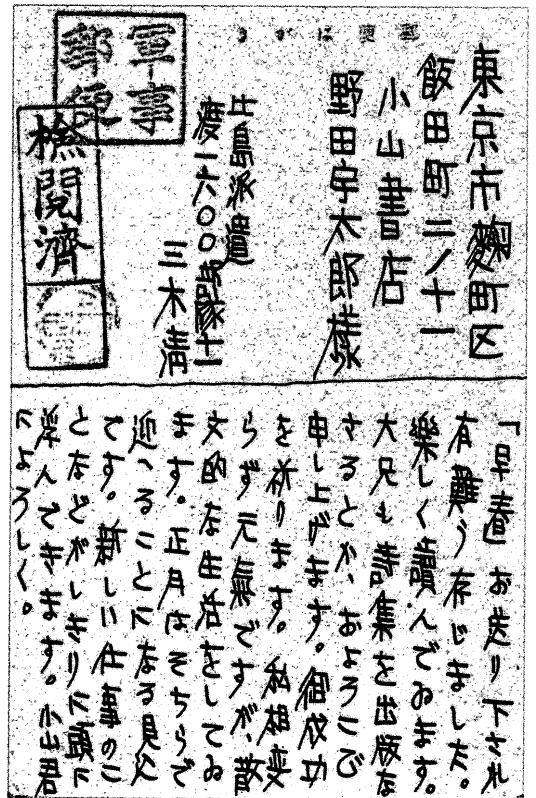
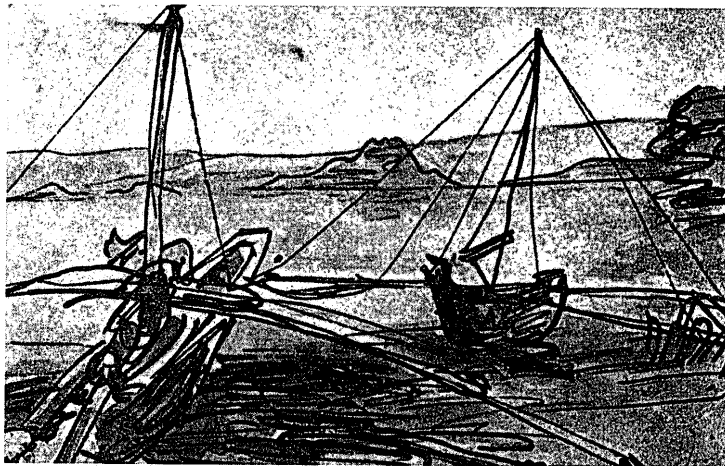
で御活動を祈ります。

〔注解〕

- 1 御新著は野田宇太郎の詩集『いくさのには』（豊国社、一九四三年）であろう。一九四三年野田宇太郎は小山書店を退職し、第一書房に入社し『新文化』の編集に携った。



(4) 1943 (昭和18) 年 9月26日付 野田宇太郎宛三木清書簡



(3) 1942 (昭和17) 年12月 野田宇太郎宛三木清書簡

(3) 一九四二(昭和二七)年二月軍事郵便ペン書葉書(検閲済 印不明)

東京市麴町区

飯田町二ノ十一

小山書店

野田宇太郎様

比島派遣

渡一六〇〇部隊十一

三木清

「早春」<sup>1</sup> お送り下され  
有難う存じました。  
楽しく讀んであります。  
大兄も詩集<sup>2</sup>を出版な  
さるとか、およろこび  
申し上げます。御成功  
を祈ります。私相交  
らず元気ですが、散  
文的な生活をしてあ  
ります。正月<sup>3</sup>はそちらで  
迎へることになる見込  
です。新しい仕事のこ  
となどがしきりに頭に  
浮んできます。小山君<sup>4</sup>  
によろしく。

東京市麴町区  
飯田町二ノ十一

小山書店

野田宇太郎様

比島派遣

渡一六〇〇部隊十一

三木清



その後はお送りありませ  
んか。お送り下さいませ  
した雑誌をお送り落手  
りたしました。厚く御  
礼申上げます。諸氏  
の寄せ書もたいへん面  
白く拝見しました。私  
元氣で、毎日同じやう  
な日を送つてゐま  
す。もう十月もなつ  
て、何だか心せはしく  
感じるやうになりました。  
中山氏にもよろし  
くお傳へ下さい。

ナチン山

田中佐一郎



(2) 1942 (昭和17) 年10月 野田宇太郎宛三木清書簡

(2) 一九四二(昭和一七)年一〇月軍事郵便ペン書葉書(検閲済 印不明)

東京市麴町区

飯田町二ノ十一

小山書店

野田宇太郎様

比島派遣

渡一六〇〇部隊十一

三木清

その後お送りありませ  
んか。お送り下さいま  
した雑誌<sup>(1)</sup>まさに落手  
いたしました。厚く御  
礼申上げます。諸氏<sup>(2)</sup>  
の寄せ書もたいへん面  
白く拝見しました。私  
元氣で、毎日同じやう  
な日を送つてゐま  
す。もう十月にもなつ  
て、何だか心せはしく  
感じるやうになりました。  
中山氏にもよろし  
くお傳へ下さい。

〔注解〕

- 1 雑誌「小山書店発行の雑誌『新風土』九月号ぐらいか。
- 2 諸氏の寄せ書「小山書店の寄稿者の寄せ書であろう。先便では中山省三郎、長谷川千秋、劉寒吉らの寄せ書が送られていた。
- 3 中山氏「中山省三郎。書簡(1)〔注解〕3を参照のこと。

たので、短いものを連載し始めました。少し続けるつもりです。ともかく現地第一主義で、内地向けの原稿を書くのはいつのことになりますか。書く氣持が出来れば、「新風土」にも送稿いたします。

小山君元氣ですか。よろしく。その他寄せ書の諸君、岩波の連中にもおついでによろしく。御健康を祈ります。

八月三日  
清

野田宇太郎様

【注解】

1 小山書店一九三三（昭和八）年二月、岩波書店社員を辞めた小山久二郎が創立した書店。良心的な造本で一流好みの文芸書を戦時下に出版し、軍官の弾圧で中絶した徳田秋声の『縮図』（一九四六年七月）を刊行した。また川端康成、武田麟太郎、間宮茂輔選『日本小説代表作全集』、島崎藤村、志賀直哉ほか編『八雲』『新風土記叢書』などを出版した。一九五〇年「チャタレイ事件」で七年にわたり裁判で争ったが罰金刑が確定し、経済的な打撃を蒙り、やがて廃業した。

野田宇太郎は一九四〇（昭和一五）年五月、火野葦平の『糞尿譚』を出版した小山久二郎の誘いで東京に出て、小山書店に入社し、雑誌『新風土』の編集を担当した。下村湖人の『次郎物語』（一九四二年二月）を出版、世に出した。

2 比島派遣一九四二（昭和一七）年一月、三木清は軍の徴用を受けてしばらく品川の岩崎邸で日を送り、後に陸軍宣伝班員としてフィリッピンのマニラに赴いた。同年二月、マニラから帰国した。

3 中山中山省三郎（一九〇四～一九四七）は詩人、ロシア文学者。茨城県真壁郡柴尾村酒寄の医師中山清の三男として生まれた。下妻中学校から第一早稻田高等学校に入学、早稲田大学露文科をただ一人卒業した。玉井雅夫（火野葦平）、丹羽文雄、寺崎浩らと『街』（一九二六年）を創刊すると共に、火野葦平らと詩誌第二次『聖杯』を出し、詩を発表した。ツルゲーネフの『散文詩』、『獵人日記』上下、メレジコフスキーの『永遠の伴侶』上下を出版した。日夏耿之介、横瀬夜雨、河井醉茗、北原白秋に親炙し、木下杢太郎を尊敬した。詩集に『標渉』、編纂に『長塚節遺稿』、随筆評論に『海珠鈔』がある。

4 長谷川川長谷川千秋。音楽家。小説家（水原吉郎）。『ヴェルトウベン』『シヨパン』『藤村詩作曲集』。

5 劉劉寒吉（一九〇六～一九八六）は小説家、詩人。小倉市（現・北九州市小倉北区）魚町生まれ。本名は濱田陸一。小倉市立小倉商業学校卒業。一九三二年岩下俊作らと詩誌『とらんしつ』を創刊。三四年『九州芸術』を発刊、三八年には『九州文学』を創刊し火野葦平の盟友として支柱的存在であった。火野葦平の後進の指導育成に当たりながら、創作活動を続けた。主な作品は『人間競争』『山河の賦』『翁』『風雪』『天草四郎』『黒田騒動』『童造寺党戦記』など。詳しくは拙稿『劉寒吉宛火野葦平書簡―野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(7)―』（福岡女学院大学紀要 人間関係学部 第二号二〇〇一年三月）を参照のこと。

6 二冊の本三木清著『知識哲学』（小山書店、一九四二年三月）と三木清著『読書と人生』（小山書店、一九四二年六月）の二冊であろう。三木清は同年一月に日本を出発してマニラに行ったので、まだ自著を手にとっていなかったものである。八月にやっと手にしたのでらう。

7 『知識哲学』三木清著『知識哲学』（小山書店、一九四二年三月）である。

8 『新風土』（一九四二年三月号、小山書店）の広告文によると、「此書は三木清氏の認識論の全貌を示すと同時に、従来認識論と謂はれるものの構造を分析して、それが存在論並に人間学と如何に密接に関連するかを示し、その歴史的制約を明らかにしたもので、存在と真理、直観と判断、主観と客観、認識と生、認識論の五項目より成立したものである。尚、知識哲学としての大系を明らかにするために附録として、ボルツァーノの命題自体、論理と直観の二項を加へた」とある。二二〇頁。定価三円。

9 『南十字星』太平洋戦争中、日本軍がマニラ占領下で発行した日本語雑誌。三木清はこの雑誌『南十字星』に八回にわたって「比島人の東洋的性格」という文章を連載した。

『新風土』一九三八（昭和一三）年六月創刊の文芸誌。小山書店。創刊号緒言に、「日本の特殊性は日本の風土から生れた。（略）波濤高き今の時代に直面しては、この風土的特殊性は更に世界的事業に価するまでに高揚されねばならない」とあった。上品で高尚な趣味的な随筆中心の文芸雑誌。野田宇太郎は一九四〇年五月、小山書店に入社、『新風土』の編集にたずさわった。

10 小山君小山久二郎（一九〇五）。小山書店店主。愛媛県生まれ。法政大学中退。岩波書店社員を経て小山書店を創立した。一九五〇年のチャタレイ裁判で罰金刑が確定し、小山書店を廃業した。

11 岩波の連中三木清はこの頃、岩波書店発行の雑誌『文学』『思想』『図書』や岩波講座『世界思潮』『哲学』『日本文学』『教育科学』『世界文学』『倫理学』に執筆し、岩波書店の社員との関係は深かった。岩波書店から刊行された単行書としては、『パスカルに於ける人間の研究』（一九二六年六月）、『唯物史観と現代の意識』（一九二八年五月）、『史的観念論の諸問題』（一九二九年六月）、『歴史哲学』（一九三二年四月）、『構想力の論理 第一』（一九三九年七月）、『哲学入門』（一九四〇年三月）などがある。



六月十一日附のお手紙拝見しました。また  
 中山、長谷川、劉氏等の寄せ書も戴き  
 ました。お元氣で御活動の御様子、何  
 より嬉しく存じます。  
 お送り下さいました二冊の本、確かに受  
 取りました。この時世にしては先づ結構  
 な出来と喜んでをります。いろ／＼お世  
 話になりましたことを厚く御禮申し上  
 げます。殊に「知識哲學」の方は、あんな  
 に度々お足を運ばせておきながら、遂  
 に新稿が出来ませんでしたのを遺憾  
 に思つてをります。いづれ機會を得て  
 大々的に増訂いたし、堂々たる本にし  
 たいと考へてをります。本が賣れるこ  
 とは有難いですが、今年の所得税はた  
 いへんらしく、税金を拂ふために更に  
 新しい本を出さねばならぬといふやう  
 な具合です。これも微用と同じく名  
 譽の御奉公といふべきでせうか。  
 出版界は多事多端の様子、御健  
 闘を祈ります。こんな時世においても  
 やはり内容のしつかりしたものを出して  
 ゆくのが結局好いことと考へます。  
 小山書店に大いに期待してゐます。  
 こちらは別に變化ありません。私も  
 おかげで元氣にやつてをりますから、  
 御安心下さい。これまで通り、書くこと  
 よりも讀むことに勤めてゐます。もつ  
 と讀むつもりです。そのうちに何か書  
 きたくならうかと思ひます。今度陣中新  
 聞「南十字星」が雑誌の形になりまし

(1) 1942 (昭和17) 年 8 月 3 日付 野田宇太郎宛三木清書簡

大磯で時局柄不穏な言葉を人前で話したので検挙されたが、大したことはないで、釈放されるはずだったのに、逃亡して困ったことだ、立ち寄ったらすぐ知らせるように、ということだった。私服が引き上げて一時間もたないうちに、ひょっこり三木が河出書房に現われた。三木と高倉は親しい仲であった。野田は三木に特高が来たこと告げると、三木は暗い顔で「訪ねて来たら自首するよに言おう」と言ったが、三木は既に高倉脱走を知っていた。間もなく高倉が捕らえられ、その自由から三木が三月二十八日警視庁に連行された。三木は巢鴨の東京拘留所から豊多摩拘留所に移され、終戦後自由を眼前にして獄中で疥癬から内臓を冒された急性腎臓炎で急死した。

「三木清氏が豊多摩拘留所で九月二十六日に急死したというニュースは、いわゆる獄死だけに文化関係者に相当のショックを与えた。三木清を死なせた相手に対する怒りも燃え上ったが、もうどうすることも出来ない。私にはまた三木氏に対する忘れ難い思い出も多かった。三木氏と特別に深い関係にあった岩波書店で、三木氏がフィリピン従軍と決つたとき内輪の送別会を催したが、その時も私は特別に一人加つていた。「文藝」第九号「九、十月合併号」もすでに原稿を締切つていたが、私は「学芸彙報」に「三木さんの死」を自分で書いて追加し、次の十一月号には三木清追悼特集する予定を立てていた。そこに、三木氏が亡くなつて二十日目の太田先生の死が重なつたのである。私にとつては色々と関係の深い人が二人も相次いで地上から消えていつたわけで、あわただしいというばかりでなく、私の心はややもすれば混乱し勝ちになつた。」(野田宇太郎『灰の季節』「朝霧のうた」修道社、一九五八年五月五日)

「十一月号は豊島與志雄の「三木清を想ふ」、中島健蔵の「三木さんの死」、清水幾太郎の「三木清」の三つの文をあつめて「三木清への回想」とした。追悼には少し物足りなかつたが、三木氏のことを書くには、まだ執筆者の顔振れが揃わぬ頃で仕方なかつた。ともかくも私はこのささやかな特集を十一月号の中に組みこむことで、三木氏の冥福を祈つたわけであつた。三木氏はいわゆる文学者ではなく、思想家であり哲学者である。しかしこの昭和期の秀才の一人の死を追悼するような思想雑誌も見当らないので、私はあえてその企てをした。」(同前)

野田宇太郎にとって三木清はやはり忘れられない先達であつた。

(1) 一九四二(昭和一七)年八月三日付軍事郵便ペン書封書(検閲済 横井)

東京市麹町区

飯田町二丁目十一

小山書店

野田宇太郎様

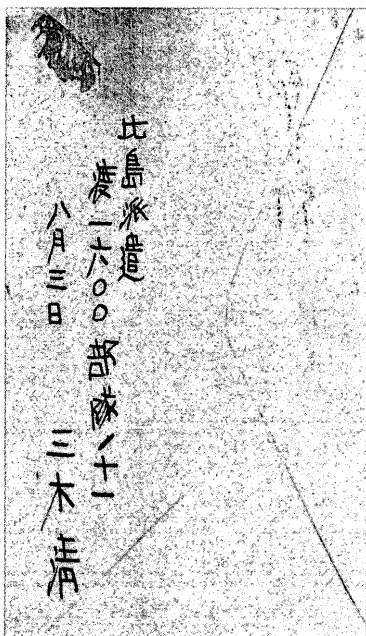
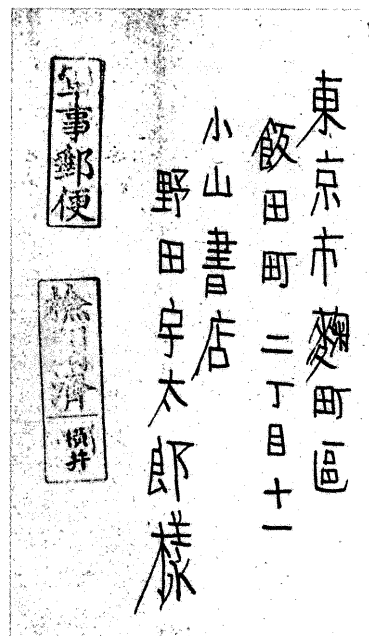
2

比島派遣

渡一六〇〇部隊ノ十一

八月三日

三木清



(1) 1942 (昭和17) 年 8 月 3 日付 野田宇太郎宛三木清書簡

- 2 一人の姉Ⅱ江口渙の二人の姉の一人。氏名未詳。
- 3 二人の姉Ⅱ江口渙の姉の娘であろう。氏名未詳。

### 3

野田宇太郎宛江口渙書簡(1)は江口の代表的な回想記評論『わが文学半生記』の誤植に対する憤慨である。泉鏡花の作品「春晝」を「春画」に誤まるとは、執筆者から見れば、全くけしからぬ失態であり、江口渙ならずとも「悲鳴をあげ」ることだろう。一方、第三者から見ると、でき過ぎた笑い話のようで、つい笑ってしまう。「校正おぼるべし」の傑作実例の一つに挙げてもいい。

野田宇太郎宛江口渙書簡(2)は、江口渙の父襄が森鷗外と東京大学医学部の同期生で軍医だったことから、野田宇太郎の『文学散歩』第一五号「鷗外生誕百年の記録」に「森鷗外と私の父」を掲載した時のものである。江口としてもかなり力を入れて書いたものと見えて七頁にわたって詳しく書いた。そして野田宇太郎宛江口渙書簡(3)では『文学散歩』第一五号「鷗外生誕百年の記録」を姉や姪に送って読んでもらおうとしている。父の回想は江口にとっても揺籃のような心地よいものであった。

今のところ野田宇太郎文学資料館所蔵の江口渙書簡は三通しか現存しないので、江口渙と野田宇太郎との関係はそれほど濃密ではない。前述のように野田の『灰の季節』や『混沌の季節』にも名前は出て来ない。従って江口の『わが文学半生記』や『文学散歩』当時だけの交流に過ぎなかったであろう。

## 二 三木清書簡

### 1

徳富蘆花の『自然と人生』に触れたことによって文学少年となった三木清が、一高生時代『歎異抄』を通して親鸞と『善の研究』を通して西田幾多郎へ傾倒を深めていった。昭和初頭のファシズム、軍国主義台頭の嵐の中でヒューマニズムの土台に新興マルクス主義理論を確立しようとしたが、検挙、入獄、転向を経て、「歴史哲学」の研究に没頭していた。終戦の年、共産党員を匿ったことから検挙され、敗戦直後獄死した。

三木清(一八九七―一九四五)は思想家、評論家。兵庫県揖保郡平井村(現・龍野市)の裕福な農家三木栄吉、しんの長男として生まれた。龍野中学校を経て第一高等学校在学中に西田幾多郎の『善の研究』に感動、京都帝国大学哲学科に入学、西田、波多野精一、田辺元、深田康算の指導を受ける。一九二〇(大正九)年七月京都帝国大学卒業、大学院に席を置き、大谷大学、龍谷大学講師となる。二年五月ドイツ留学、ハイデッガーに師事。二年八月フランスのパリに移り、ふとパスカルを手にし研究に専念する。二五年一〇月帰国、二六年四月第三高等学校講師となり、六月『パスカルに於ける人間の研究』を処女出版した。一九二七(昭和二)年法政大学の哲学科主任教授となる。三〇年日本共産党に資金を提供したという嫌疑で検挙され拘留された。そのため法政大学を辞職した。三三年七月滝川幸辰の京大事件、ドイツのナチス、イタリアのファシズムの独裁政治に抗議する「学芸自由同盟」を結成、活動を実践した。四〇年三月『哲学入門』を岩波書店から出版、発刊まもなく一〇万部を越す驚くべき売れ行きであった。四二年一月「戦時認識の基調」を『中央公論』に発表、軍部の忌諱に触れ非難攻撃激しく、その後、総合雑誌への掲載なくなる。軍の徴用を受けて陸軍宣伝班員としてマニラに赴く。二月帰国。一九四五(昭和二〇)年三月治安維持法違反容疑の高倉テルを匿い、逃亡させた嫌疑により検挙、東京拘留所に送られ、敗戦直後の九月二六日、豊多摩拘留所で苛酷な取り扱いのため獄死した。享年四八歳。では、野田宇太郎はいつから三木清と交流を深めていったのであろうか。野田宇太郎宛三木清書簡の中で一番古い一九四二(昭和一七)年八月三日付の封書によると、野田が小山書店発行と思われる二冊の本(三木清の自著であろう)をフィリップスのマニラにいた三木に送っている。これから推察すると、野田が小山書店に入社した一九四〇年五月以後、小山書店刊行の三木著作『知識哲学』と『読書と人生』の編集担当になった頃から接触が始まったのではあるまいか。従って一九四一(昭和一六)年後半から四二年二月以前の頃と考えられる。そして、野田が三木に最後に会ったのは、敗戦の年一九四五年三月九日、あの東京大空襲の数時間前であった。野田宇太郎の『灰の季節』(修道社、一九五八年五月五日)によると、四五年三月九日河出書房(四四年四月、第一書房を退社、河出書房に転職)にいた野田を、警視庁の特高と新橋署の私服が訪ねて来た。高倉テルが警視庁から脱走したと言う。私服が野田を訪ねたのは、高倉の交友録に野田の名があったからだ。

江口渙が五高に入学した時、同級に落合直文の長男落合直幸がいた。渙は直幸と仲よく、鷗外の「うた日記」原稿の一枚を直幸からもらった。なぜあの原稿が直幸の手にはいったか、忘れてしまった。以上が江口渙「森鷗外と私の父」の内容である。

2 明治三十三年四月、江口渙は一九九九（明治三二）年五月、陸軍医務局長で軍医総監だった小池正直（東大医学部で森鷗外・江口渙と同期）と正面衝突して、小倉の第一二師団軍医部長を最後に陸軍を辞めた。江口渙は一旦郷里の栃木県烏山町に隠棲したが、また東京に出て、一九〇〇（明治三三）年四月、三重県宇治山田市の日本赤十字社病院院長となった。この「明治三十三年四月」が原稿では落ちていたのである。調査して後で書き入れるつもりで空けておいたのが、つい失念して書き入れないまま、出稿してしまったものに見える。校正時に書き入れられ、「文学散歩」第一五号「森鷗外と私の父」一一八頁で「明治三十三年四月」は確かに入っている。

(3) 一九六二（昭和三七）年九月一七日付5円官製葉書ペン書（消印 烏山 37・9・17 後016）

東京都武蔵野市

吉祥寺南町三ノ二五〇七

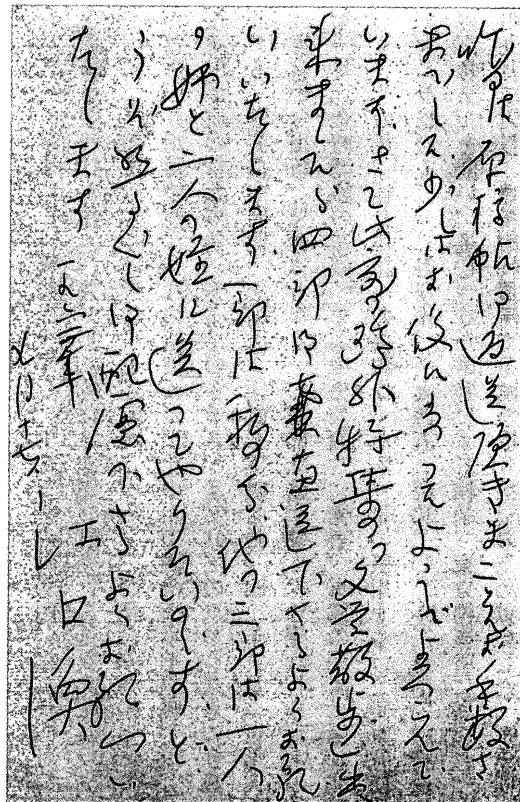
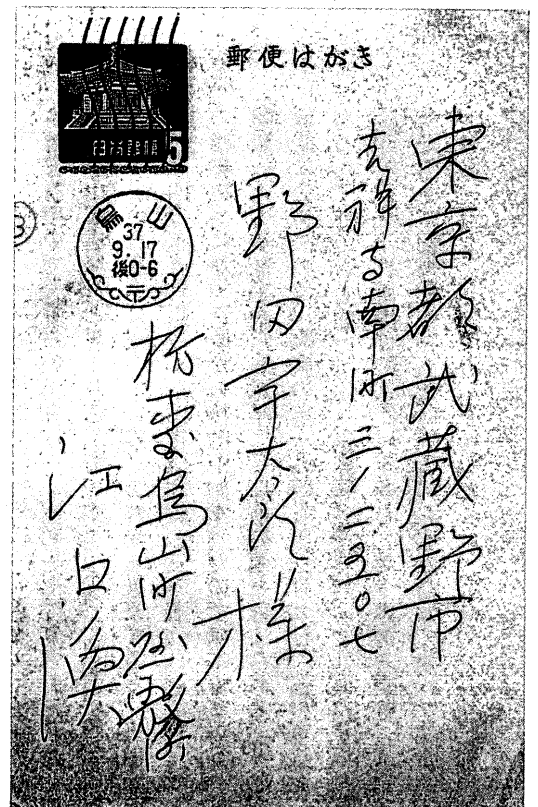
野田宇太郎様

栃木県烏山町屋敷町

江口 渙

昨日は原稿帖御返送頂きまことにお手数さまでした。少しはお役に立つたようでよろこんでいます。さて此度の鷗外特集の「文学散歩」出来ましたら四部御直送下さるようお願いいたします。一部は私の分、他の三部は一人の姉と二人の姪に送つてやりたいのです。どうぞ然るべく御配慮下さるようお願いいたします。一九六二年

九月十七日 江口 渙

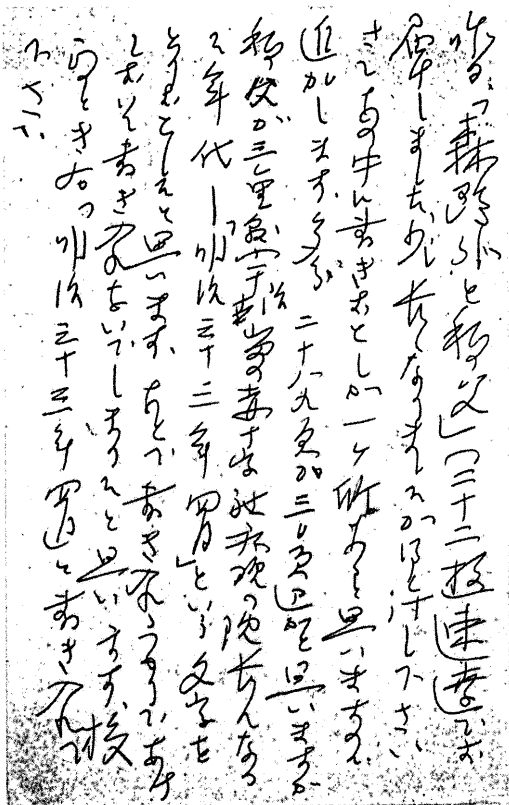
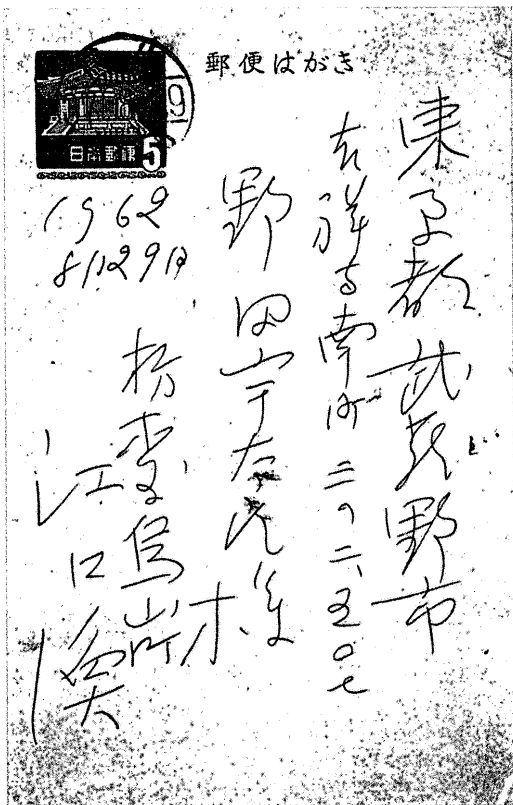


〔注解〕

1 原稿帖「文学散歩」第一五号に掲載された江口渙の「森鷗外と私の父」の原稿のことであろう。江口渙が野田宇太郎に原稿帖の返送を要求したので、野田が返送したものと見える。

(3) 1962（昭和37）年9月17日付 野田宇太郎宛江口渙書簡

正のとき右「明治三十三年四月」と書き入れて下さい。



(2) 1962 (昭和37) 年 8 月 29 日付 野田宇太郎宛江口渙書簡

〔注解〕

1 「森鷗外と私の父」II『文学散步』第一五号「鷗外生誕百年の記録」(一九六二年一〇年一日)に掲載された江口渙執筆の「森鷗外と私の父」。

森鷗外と江口渙の父江口襄とは東京大学医学部を一八八一(明治一四)年七月卒業した同期生であり、同じ軍医であった。江口渙が父母から聞いた話を中心にした鷗外と江口襄らとの回想録である。

一八七七年、東大医学部三等本科生三〇名中、森鷗外四番、小池正直一〇番、江口襄一三番、賀古鶴所一四番という席次だったという。鷗外はクラスで一番年少であったが、席次は四番と下らなかつた。教室でのノートの筆記は抜群に早く、和紙の罫紙に毛筆を使って、先生の講義の進行より先に進んで、先生の言葉を待つほどであった。

鷗外は普段から勉強していたので、試験勉強はせず、里見八犬伝などを読んで悠々としていた。当時の大学生は道楽者が多く、根津遊廓に通う者が少なくなかつたが、鷗外は寄宿舎に残って勉強していた。

鷗外が離婚したのは、「子供の生まれた日数が結婚日数よりも早すぎる。これは自分の子ではない。御土産だ」という理由だった。江口襄や賀古鶴所が立ち会って子供を診察し、立派な早生児と診断したが、鷗外は認めず、離婚したという。江口襄は「あの子は確かに森の子だよ」と言つたが、母みねの強要によって離婚させられたという事情を知らない江口渙の母は鷗外の離婚の話になると、「森さんてひどい方ねえ」と憤り、鷗外を非難したそうである。

鷗外の「雁」式拾式に、三人の大学生が不忍池を散歩している時、石を投げると、雁に当たって死に、一人が池に入って雁を拾い、みんなで食べる話があるが、その大学生の中に、江口の父もいたと聞かされたらしい。ドイツ留学を命ぜられたのは鷗外が一八八四明治一七年、江口襄が一八八七年であった。ベルリンで鷗外と江口襄が一緒に撮影した写真は二葉あるが、二葉とも他の者はモーニングかフロックコートなのに、鷗外だけは軍服の礼服を着ている。若い時から鷗外は礼服が好きで、気取り屋だったと江口は書いている。一八九九年江口襄は小池正直と衝突して陸軍を辞めた。江口の後任で小倉に左遷された鷗外も、小池正直の弄した悪辣な小策の犠牲者であった。江口襄は陸軍退官後、一旦故郷烏山町に隠棲したが、また上京した。一九〇〇(明治三三)年四月、三重県宇治山田市の日本赤十字社病院院長となり、一〇年近く勤めた後、烏山に引退し、一九二四(大正一三)年七月三十一日、六九歳で亡くなった。

江口渙は五高から東大英文科に入学したが、江南文三が「スバル」の編集をしていたので、鷗外に会わせてくれと頼んだが、「森さんは人が訪ねて来るのを嫌がる人だから遠慮した方がいい」と言つたため、あきらめた。江口渙の東大生時代、鷗外がしげ子夫人同伴で根津八重垣町の夜店の本屋を覗いているのを時々見かけた。

芥川龍之介の話によると、夏目漱石歿後、本郷団子坂の観潮楼に鷗外を訪ねたが、図書頭の鷗外は腎臓病が悪く、脚がむくんで靴を履くのも大変な状態であった。軍服に長靴を履いて足を引き摺り坂を登って、宮内省に出勤した。部下が「お腰を押しましようか」と言つても、「いや、大丈夫」と断り、長靴の踵で地面を擦るようになって、無理に登つた。芥川は「森さん、君のことを話していたよ。江口渙君は江口襄君の息子さんだそうだね。江口襄君も良い息子さんを持つたものだ、と言つてたよ」と江口渙に伝えたそうである。

お手紙有難く拝見しました。「わが文学半生記」<sup>(1)</sup>に対する御好意にみちた御言葉を心から有難く思っています。岡田雅子は私の思いがいでした。安倍能成さんからも注意してきました。そのほか私自身の書きそこないや思いがけいもありますが何しろ誤植が多いので閉口しています。泉鏡花の「春畫」「春畫後刻」かどちらも「春畫」になつてゐるのに悲鳴をあげました。書を畫とまちがえ畫を画と改めた校正偽りにフンガイしました。近く大訂正してゾウ眼にしてみらうことになつてゐます。この改へんを「文学半生記」第二印として新日本文学に連さいしています。機会がありましたらよんで下さい

〔注解〕

- 1 お手紙Ⅱいつの江口渙宛野田宇太郎書簡か未詳。
- 2 「わが文学半生記」Ⅱ江口渙著「わが文学半生記」(青木書店、一九五三年七月一日、青木文庫)。文学回想記。その後、一九五八年九月二十日、角川書店から角川文庫として壺井繁治の解説がついて出版された。さらに青木文庫も一九七八年一月二五日、大内兵衛の書簡「わが文学半生記」を讀んで」とこの書簡についての江口渙の付記が無題で追加された改裝版が出版された。三種類の「わが文学半生記」の間には本文の改訂異同はない。御好意にみちた御言葉Ⅱ江口渙宛野田宇太郎前便中の言葉であろう。野田宇太郎が執筆した「わが文学半生記」書評はない。
- 3 岡田雅子Ⅱ増田雅子の誤り。江口渙著「わが文学半生記」「その頃の芥川龍之介 三 新詩社の新年短歌会」に、「茅野雅子とは岡田雅子といった。私が彼女の歌をしたつたのも、やはり中学生のときで「明星」の誌上であつた。そして、一九〇五年(明治三十八年)の四月に与謝野晶子、山川とみ子、岡田雅子合著の歌集「恋衣」を中学卒業の記念として買ったほどの愛読者だつた。」
- 4 岡田雅子Ⅱ増田雅子の誤り。江口渙著「わが文学半生記」「その頃の芥川龍之介 三 新詩社の新年短歌会」に、「茅野雅子とは岡田雅子といった。私が彼女の歌をしたつたのも、やはり中学生のときで「明星」の誌上であつた。そして、一九〇五年(明治三十八年)の四月に与謝野晶子、山川とみ子、岡田雅子合著の歌集「恋衣」を中学卒業の記念として買ったほどの愛読者だつた。」と書いたが、安倍能成たちの指摘で「岡田」は「増田」の誤りであることに気付いた。野田からも誤りを指摘されたのである。茅野雅子(一八八〇〜一九四六)は歌人、大阪市道修町の薬種問屋を営む増田宇兵衛の二女。旧姓は増田、本名まさ。相愛女学校を中退し、一九〇〇(明治三三)年秋、新詩社に入社、一月から「明星」第八号より短歌を発表する。一九〇四年上京、日本女子大学に入学、〇五年一月与謝野晶子、山川登美子と合著「恋衣」(本郷書店)を刊行した。「明星」同人茅野蕭々と結婚した。一九一七年一月歌集「金沙集」(岩波書店)を出版、一九二一年日本女子大学国文学科教授となる。短歌会「春草会」「茅花会」を主宰し、短歌・随筆・童話・童謡で活躍した。

- 5 安倍能成(一八八三〜一九六六)。評論家・哲学者・教育者。愛媛県松山市生まれ。松山中学を経て、一九〇二年第一高等学校に入学、茅野蕭々と校友会文芸部委員となる。〇六年九月東京帝国大学哲学科に入学、カント、スピノザを研究、〇七年秋から漱石山房の木曜会に出席する。二六年ヨーロッパ留学から帰朝後、京城帝国大学教授となる。四〇年九月より第一高等学校校長に転じた。四六年一月、幣原内閣の文部大臣となり、同年一〇月学習院長となった。
- 6 泉鏡花の「春畫」「春畫後刻」Ⅱ江口渙著「わが文学半生記」「少年期の私と文学」に、「さらに四年生から五年生にかけては、泉鏡花に夢中になつた。「注文帳」「巽巳巷談」「きぬきぬ川」「春畫」「春畫後刻」「湯女の魂」などをつぎつぎに新小説でよんだ。」とあり、「春畫」の「畫」は「畫」とあるべきところを「畫」と誤り、これをさらに「画」と簡体字化して誤まつたものである。もし簡体字化するならば「畫」は「昼」とすべきところである。青木文庫、角川文庫、青木文庫改裝版の三種類とも「画」と誤まつており、改訂されていない。
- 7 ゾウ眼Ⅱ象眼。象嵌。印刷で鉛版などの修正箇所をくりぬき、別の活字や版をはめ込んで訂正すること。しかし、前項で述べたように三種類とも訂正されていない。

(2) 一九六二(昭和三七)年八月二九日付5円官製葉書ペン書(消印) 鳥山 37・8・29 後016)

東京都武蔵野市

吉祥寺南町三の二五〇七

野田宇太郎様

2月29日 栃木県烏山町  
1986年8月 江口渙

昨日、「森鷗外と私の父」(二十二枚)速達でお届けしました。少し長くなりましたが御許し下さいさてあの中に書きおとしがヶ所あると思ひますので追加します。多分二十八頁か三〇頁辺かと思ひますが私の父が三重県宇治山田の赤十字社病院の院長になつた年代「明治三十三年四月」という文字をとりおとしたと思ひます。あとで書き入れるつもりであけておいて書き入れなりましたと思ひます。校

れた。同月二五日、妻福子死亡。七月、岩崎栄子と四婚。日本共産党および日本民主主義文学同盟議長。五二年七月から五三年四月「わが文学半生記」「続わが文学半生記」(『新日本文学』)発表。六四年文学運動方針上の意見相違を理由として新日本文学会より規約を無視して除名された。七一年歌集「わけのいいのちの歌」(七〇年六月、新日本出版社)で第二回多喜二・百合子賞を受賞。六五年一月〜六七年五月、「たたかい作家同盟」を『文化評論』に連載した。『江口渙自選作品集』全三巻(七二年八月〜七三年 月新日本出版社)がある。一九七五(昭和五〇)年一月一八日、栃木県那須郡烏山町の自宅で逝去。享年八八。本名は渙(きよし)で、筆名は渙(かん)。

江口渙と野田宇太郎との交流はいつから始まったのであろうか。『野田宇太郎蔵書目録』(小郡市役所、一九八七年三月二五日)によると、江口渙書簡は三通記載されている通り、三通現認された。それは一九五三(昭和二八)年一〇月二日が一番早く、一九六二年九月一七日が一番新しい。ただ野田宇太郎の戦争末期(一九四一〜四六年)の記録『灰の季節』(修道社、一九五八年五月五日)や被占領下(一九四六〜四八年)の記録『混沌の季節』(大東出版社、一九七一年五月二〇日)に江口渙の名はない。

九年間三通の葉書が現存しているのである。これから推測すると、江口渙が『わが文学半生記』を出版した一九五三(昭和二八)年七月から間もないころであろう。そして野田宇太郎は、江口渙の父襄が森鷗外の東京大学医学部時代の同期生であり、同じ軍医となった仲間であったことから、『文学散歩』第一五号「森鷗外生誕百年の記録」(一九六二年一〇月一日)に掲載する原稿を江口渙に依頼したのであった。従って江口渙と野田宇太郎の間には「わが文学半生記」と「森鷗外生誕百年の記録」とが橋渡しとして介在する。以下書簡を見てみよう。

2

(1) 一九五三(昭和二八)年一〇月二日付5円官製葉書ペン書(消印 栃木・烏山 28・10・2 後0-6)

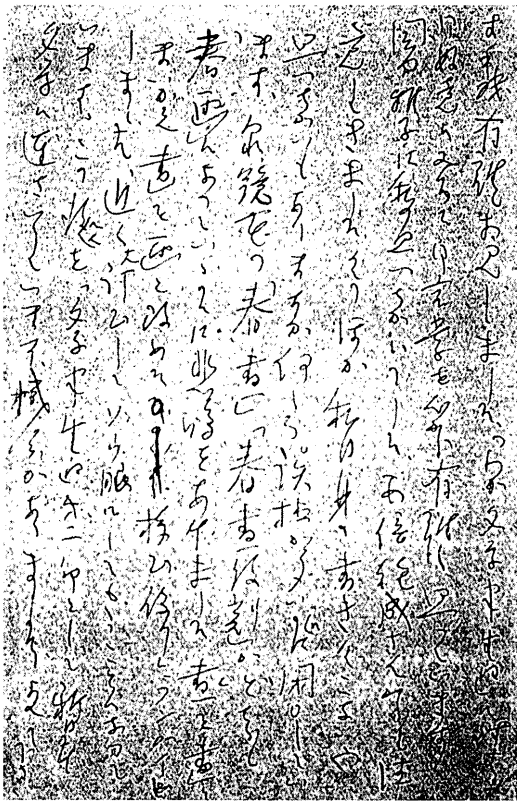
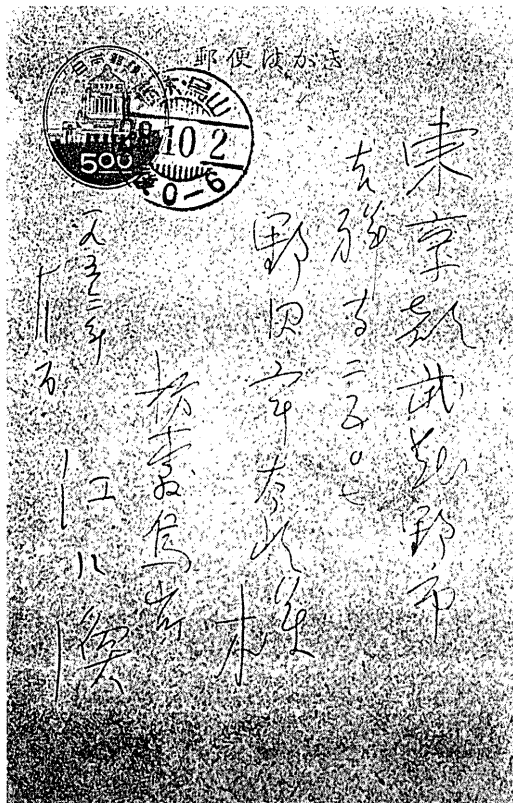
東京都武蔵野市  
吉祥寺二五〇七

野田宇太郎様

栃木県烏山町

江口 渙

一九五三年  
十月二日



(1) 1953 (昭和28) 年10月2日付 野田宇太郎宛江口渙書簡



# 江口渙・三木清書簡の紹介

—野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(9)—

## 一 江口渙書簡

1

夏目漱石門下では異色の存在であった江口渙は、漱石に対して生前の濃密な関係から漱石歿後は批判的傾向が強くなった。それは耽美的・浪漫的傾向から現実的・自然主義的傾向へ、さらに社会主義・無産者芸術に進む中で、あるいは当然の帰結であったかもしれない。江口渙の父・襄<sup>のほ</sup>は、森鷗外の同期生の陸軍軍医であった。

江口渙は一八八七(明治二〇)年七月二〇日、東京市麴町区(現・千代田区)富士見町一丁目(小山内薫の持ち家)で、父・襄、母・甲子<sup>のほ</sup>の長男として生まれた。小説家・評論家・歌人・児童文学者・社会運動家。二姉があった。父は栃木県烏山町出身で、東京大学医学部では森鷗外と同期生の陸軍軍医となり、鷗外の『雁』のモデルの一人と言われている。母は徳島県出身の海軍大佐江川一郎の妹。大阪偕行社付属尋常高等小学校に入学、卒業(上級生に山中峯太郎、下級生に宇野浩二、桜田常久、間宮茂輔)後、東京府立第一中学校入学、三重県立第四中学校編入学、一九〇五年三月同校卒業。中学時代は野球、短艇の選手として活躍、回覧雑誌の短歌、詩、俳句、小説に熱中する。〇五年九月、金沢の第四高等学校文科入学、四高俳句会に出席、水郷と号した。〇六年五月四高退学、北海道放浪、〇八年九月、熊本の第五高等学校文科再入学、五高俳句会に参加、河東碧梧桐を阿蘇山に案内したが、失望決別。一二年六月五高卒業。一九二二(大正元)年九月、東京帝国大学英文文学科入学。『スバル』(一九二二・一二)処女作短編小説「かがり舟」を発表。一四年五月、久米正雄の紹介で夏目漱石の門に

## 原武 哲

入り、漱石山房の木曜会に列した。一六年東大英文学科中退。同年一二月九日、漱石の死に大きな衝撃を受けた。同月北川千代(後に童話作家)と結婚。一七年一月、芥川龍之介らの第四次「新思潮」に対抗して佐藤春夫・久保勘三郎らと同人社誌「星座」を創刊、廃刊。一七年春、東京日日新聞社社会部記者となり、同年六月、芥川龍之介『羅生門』の書評を『東京日日新聞』に発表、最初の高い評価を与え、出版記念会を主催した。約百日で『東京日日新聞』を退職、『帝国文学』編集委員、「児を殺す話」(『帝国文学』一七・一一)、「蛇と雉」(『中央文学』一八・一)によって文壇に認められた。一九年六月、芥川の世話で処女短編集『赤い矢帆』(新潮社)によって新進作家としての地位を確立した。『労働者誘拐』(一九・一〇)、最初の評論集『新芸術と新人』(二〇・四)刊行。作風は耽美主義から自然主義、現実主義の傾向を強め、大正中期から社会主義化した。二〇年七月、八月『東日』に「性格破産者」発表、二〇年一二月日本社会主義同盟結成大会に参加、中央執行委員となり、文学を捨て実践運動に進む。二二年九月北川千代と離婚、ギロンチン社に資金提供。二三年九月相馬孝と再婚。二四年テロリズム失敗で検挙され、一〇日間拘留釈放。テロリズムに否定的となり虚無感に陥る。一九二七(昭和二)年五月日本無産派文芸連盟設立。二八年三月一三日日本左翼文芸家総連合創立総会に参加、同月全日本無産者芸術連盟(ナツプ)に加盟、アナキズムからマルクス・レーニン主義へ移行した。二九年二月日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)を結成、中央委員となり、三〇年四月第二回大会で中央委員長に就任、三三年六月第六回大会まで続いた。三六年一月治安維持法違反で検挙、投獄され、三七年一月保釈出獄、三八年三月執行猶予。四七年一月二〇日妻孝死亡。一〇月木野福子(日本画家)と三婚。一一月日本共産党入党。一二月新日本文学会結成、中央委員となる。五五年一月、第七回大会で幹事会副議長に選ば